

# 保育所実習における学びの特徴に関する一考察

## －実践と理論を結ぶ振り返りに焦点を当てて－

### A Study on the Characteristics of Learning at Exercises in Nursery Schools －Focusing on the Review to Connect Theory with Practice－

(2019年3月29日受理)

榎尾真佐枝 坂田 季穂  
Masae Makio Kiho Sakata

Key words : 保育所実習, 学びの特徴, 保育所保育指針, 実践と理論, グループワーク

## 要 旨

本稿は、本学子ども学科で実施している保育所実習に参加した学生がどのような学びを得ているのかを、保育所保育指針の内容と照らし合わせながら明らかにすることを目的とした。さらに、実践と理論を結ぶことにより、保育士になることへの意欲を高められるような授業について探求した。その結果、実習生は、子どものトラブル場面に遭遇することで失敗感を抱き、保育職に就くことに不安を感じるようになった。しかし、実習生の個々の実践についてグループワークを通し、保育理論と結ぶことで学びが深まり、保育所実習で抱いたマイナスイメージをポジティブな思考へと転換できることも明らかとなった。このことから、今後の実習にかかわる事前・事後のよりよい指導内容についての具体的なヒントを得ることができた。

## 1. 問題の所在

子どもを取り巻く環境は絶えず変化し続け、わが国の保育政策は大きな変換の時期を迎えている。児童福祉法の改正や子ども・子育て支援新制度の施行、さらに保育所保育指針の改定や幼児教育・保育の無償化など、待機児童の解消や保育所等施設数の増加に対応する保育士の確保がますます求められている。このような保育士需要の拡大に伴い、保育士養成校数も増加している。

しかしながら、現状は保育士不足の問題が後を絶たず、社会的課題となっている。養成校卒業後、保育士として保育所等に就職するも、すぐに辞めてしまう早期離職の問題は大きいと言えるだろう。また、養成校で保育士資格を取得したにも関わらず、保育所等には就職せず、一般企業など他の職業を選択する学生が多いことも保育士不足に拍車をかけている大きな要因の一つである。入学当初は「保育士になりたい」と夢を抱いていた学生も、

保育実習後に「自分には無理だ」と進路変更をすることも少なくない。保育士不足等の社会的課題を解決するためにも、今、養成校が成す役割は極めて重要であり、保育士養成の中核をなす保育実習や保育実習指導はその要となるであろう。

保育所保育指針の改定に伴い、保育士養成課程の見直しも始まっている。保育所保育指針改定のポイントは、①乳児・1歳以上3歳未満児の保育に関する記載の充実、②保育所保育における幼児教育の積極的な位置づけ、③子どもの育ちをめぐる環境の変化を踏まえた健康および安全の記載の見直し、④保護者・家庭および地域と連携した子育て支援の必要性、⑤職員の資質・専門性の向上、である。また、改定の要点として「養護に関する基本事項」が総則において記載され、養護の重要性が改めて強調されている。この保育所保育指針の改定を基盤として、2018年保育士養成課程も改正された。保育士養成課程に関する具体的な見直しの方向性として、①乳児保育の充

実、②幼児教育を行う施設としての保育の実践、③「養護」の視点を踏まえた実践力の向上、④子どもの育ちや家庭への支援の充実、⑤社会的養護や障害児保育の充実、⑥保育者としての資質・専門性の向上、の大きく6つの点が挙げられ、より実践力のある保育士の養成に向け2019年度より適用される。その改正の中で、保育実習の重要性も再認識されている。保育士の資質向上が求められる中、「保育士になりたい」と夢を持った学生が実習を経て、子どもと関わる楽しさや、やりがいを知り、さらに意欲を高めてほしいと願うのは、養成校教員も保育現場の先生方も同じである。しかしながら、先述した通り保育実習後に進路に悩み、職業を変更するケースが後を絶たない。

國田、西、小阪（2019）は、保育教育系大学生の職業レディネスが、入学後の大学での学びや実習経験を通してどのように変化するかを検討している。この研究では、初期（多くの場合は保育所実習）の実習経験で感じる期待と現実のギャップによるリアリティショックにより、職業レディネスが低下するということが示されている。しかしその後実習経験を積むことで、職業レディネスが向上し、さらには児童館実習や学童保育実習など、付加的な資格に関わる実習を経験した学生のほうが、職業レディネスが高い傾向にあることも國田らは明らかにしている。実習経験を積むことで実習に対する心構えができることや実習の流れを想定できること、さらに自らのスキルが上がることで、初期に受けるリアリティショックが軽減されることは、重要なことであると考えられる。

また、槇尾（2018）は、児童館実習における学びの特徴を保育所実習との比較から考察している。調査では、保育所実習での満足度が60%だったのに対し、児童館実習終了時には90%以上が「楽しかった」と感じ、ほぼ全員が「勉強になった」と回答していると示している。実習での学びとして、保護者との関わりや活動（イベント）の進め方、子ども（0～18歳）との関わり方など、保育所実習とは異なる児童館の機能や特性を踏まえた深い学びの特徴を明らかにしている。この学びの特徴は、保育所実習で「いやだった」と感じていた学生が、児童館実習を経験することにより、子どもと関わることの楽しさを再び感じ、保育職に就きたいと考え直すという要因にもつながっていた。つまり、学生の職業に対する意欲は、

実習で何を学んだのかを理解することと深く関係していることがわかる。逆を言えば、國田らも述べているように、学生自身が実習で何を学んだのかをわからないままにしていることが、保育職への就職に対する意欲の低下につながっているのである。

もちろん、学生は保育所実習で何も学んできていないわけではない。山本（2016）は保育所実習で学生が獲得したものを、実習前の自己課題に対する振り返りと、実習後の今後の課題から検討している。実習から得られたものとして、「子ども理解」「適切な援助」「言葉掛けについて」「保育計画について」「発達について」の大きく5つの項目を挙げている。これらは、実際に子どもと触れ合ったり、現場の先生方を観察したりする中で学び得ている。しかしながら、具体的な内容や学んだ経緯を見てみると、「不十分」「予想不足」など自らの失敗体験から教訓を得ている場合が多いように見える。養成校教員は、保育経験の少ない学生が、いきなり現場の先生方のように保育ができるわけもなく、失敗を繰り返して成長していくものであると考えているのだが、学生は自らの失敗を次につなげようとする気持ちはあるものの、それ以上に失敗感や挫折感のほうが大きく、そのまま立ち直れない場合がある。実習後に学生と面談する際にも、口を揃えて言うのが「担任の先生のようにできなかった」「大変だった」といった言葉である。学生自身が自らの課題と向き合うことは必要であるが、このように、失敗したと感じている感想や反省にとどまっておき、実習で何を学んだのか実際のところはっきりわからないままの学生が多いのではないかと推測される。

保育実習実施基準において、保育実習の目的は「保育実習は、その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用的能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする」と掲げられている。このように本来、実習において体験的な学びを深め、その実践と大学で学んだ知識を結ぶことは、その後の学生の保育職に対する意欲の向上につながるはずである。つまり、今まで見られた実習後の意欲低下を阻止するため、体験的な学びを保育理論と結び授業を試みることにより、学生の意欲向上を図ることができるのではないだろうか。

## 2. 研究目的

そこで本研究では、本学子ども学科で実施している保育所実習に参加した学生の学びの内容について、保育所保育指針と照らし合わせながら意味づけをし、保育所実習における学びの特徴を明らかにすることを目的とする。さらに実践と理論を結びつけることにより、保育士になることへの意欲を高められるような授業について探求する。

## 3. 研究方法

### (1) 調査対象者

本学子ども学科に所属し、平成30年度保育所実習に参加した学生60名（2年生54名，3年生6名）を対象とした。対象者60名が実習中担当したクラスは、実習園によって配属形態が異なっていた。主には、次にあげる3つのパターンがみられた。

- ① 保育所実習期間(20日間)一貫して同じクラスを担当させていただくパターン。
- ② 前半(10日間)と後半(10日間)でそれぞれ違う年齢のクラスを担当させていただくパターン。
- ③ 全クラスを万遍なく担当させていただくパターン。

以上のことを踏まえたうえで、対象者が担当したクラスについてまとめたものが、表1である。なお、先述した通り、1人の実習生が複数のクラスを担当しているので、実習生の合計人数は60人を超えている。

表1 実習で経験したクラスの年齢と実習生の人数

クラス	人数
0歳児クラス	9
1歳児クラス	15
2歳児クラス	18
3歳児クラス	10
4歳児クラス	6
5歳児クラス	15

### (2) 調査手順

- ① 対象者に、実習中に一番心に残ったエピソードを書いてもらう。

- ② そのエピソードが、5領域・乳児保育のどれに当てはまるのかを確認して振り分ける。同じテーマの学生同士でグループを作る。
- ③ グループ内でディスカッションをしながら、保育所保育指針と照らし合わせ、自分たちが何を学んだのかを「ねらい」に沿って模造紙にまとめる。
- ④ 実習報告会にて、発表する。

### (3) 調査実施日

本学の平成30年度保育所実習時期は、平成30年5月21日(月)～6月12日(火)の20日間であった。実習終了後、個々で礼状作成や自己課題の振り返り等を行い、その後調査を実施した。調査は、事後指導の保育所実習研究Ⅰの授業内で行った。実習研究Ⅰの授業は2クラスに分かれており、1クラス29名，2クラス31名編成で、それぞれ表2の日程で調査を実施した。

表2 調査実施日と内容

調査実施日	調査内容
1クラス: 6月20日(水) 27日(水)	個々でエピソード記録 (手順①)
2クラス: 6月21日(木) 28日(木)	
1クラス: 7月4日(水) 11日(水)	グループワークの実施 (手順②・③)
2クラス: 7月5日(木) 12日(木)	
1クラス: 7月18日(水) 2クラス: 7月19日(木)	各々のクラス内で発表
1・2クラス: 8月6日(月)	実習報告会で発表(手順④)

### (4) 分析方法

各グループが、ワーク後に模造紙にまとめた内容について、共通点に着目してカテゴリ分けを実施し、得られた結果について考察した。

### 4. 研究結果

#### (1) 調査対象者について

本学子ども学科に所属し、平成30年度保育所実習に参加した学生60名を対象とし、全員からエピソード回答を得ることができた。その内訳は表3の通りである。

表3 回答者の内訳

調査実施日	回答者数
1クラス：6月27日（水）	29名
2クラス：6月28日（木）	31名

#### (2) エピソード回答の結果について

対象者から得られたエピソードの内容について、まずは「養護」と「教育」に分類し、その後さらに「乳児保育」「5領域(健康・人間関係・環境・言葉・表現)」に照らし合わせながら分類したところ、13グループを編成することができた(表4参照)。

表4 テーマごとのグループ編成について

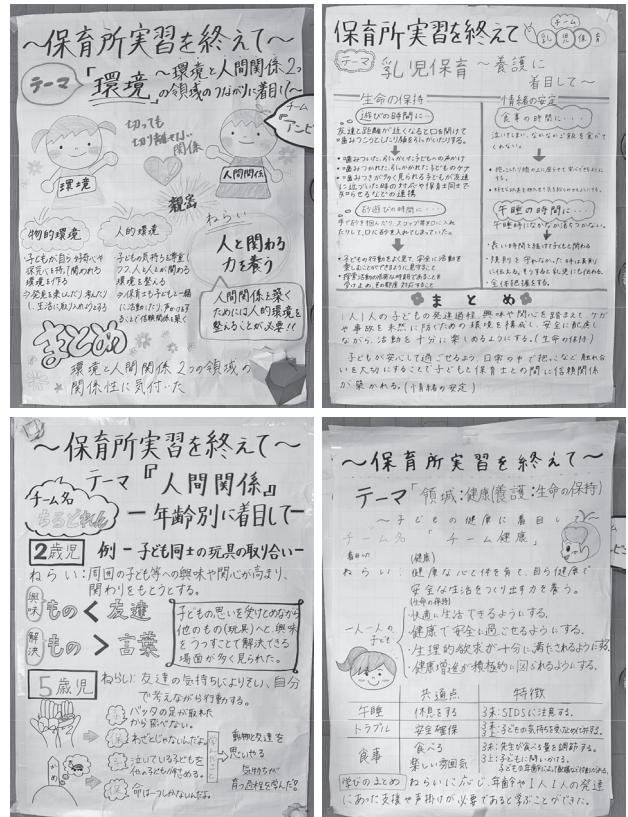
内容	エピソード数	グループ数
教育：5領域「人間関係」	21	4
教育：5領域「言葉」	10	2
教育：5領域「表現」	9	2
教育：5領域「健康」	8	2
教育：5領域「環境」	4	1
乳児保育	4	1
養護：情緒の安定	4	1
合計	60	13

最も多かったエピソードは「人間関係」(21)であり、次いで「言葉」(10)、「表現」(9)と続いていた。逆に、「環境」「乳児保育」「情緒の安定」(4)は、エピソードが少なかった。「乳児保育」「情緒の安定」のエピソードが少なかったのは、0歳児クラス担当の実習生が少なかったためと思われる。

#### (4) グループワークの結果について

(2)で編成した13グループにおいて、授業中、グループワークを実施した。それぞれのグループで話し合った内容を模造紙にまとめた。(詳細は、写真参照)

写真 グループワークのまとめ(一部)



模造紙にまとめた内容より、さらに「まとめ」の部分ピックアップし、一覧表にしたものが表5である。つまり表5は、今回の保育所実習における「学びの特徴」の一覧表と言える。

着目点で最も多かったのが、「トラブル」であり、次いで「年齢」、そして「食事」と続いていた。「トラブル」「年齢」は、どのグループ(どのテーマ)においても着目度が高かった。「食事」は、健康、乳児保育のみで見られた。



表5 学びの特徴

内容	学んだこと
人間関係	<p>「子ども同士のかかわり」に着目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1,2歳児：保育士が仲介し、他の子どもとのかかわり方を徐々に身につける。 ～自分の気持ちも相手の気持ちもまだ十分には理解できない。</li> <li>3歳児：自分で伝えることは伝え、言えないことは保育士が代弁する。 ～自分の気持ちは伝えるが、相手の気持ちにはまだ気づきにくい。</li> <li>5歳児：子ども同士で解決する。(保育士は遠くで見守る。)～相手の気持ちに気づく。</li> </ul> <p>「年齢」に着目、「トラブル」に着目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>3歳未満児：自分でトラブルを解決することは難しい。</li> <li>3歳以上児：自分たちでトラブルが解決できるように、保育士は見守る。</li> <li>子どもは経験から学ぶ。</li> </ul> <p>「トラブル」に着目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1,2歳児：善悪の区別がつかない。自分の気持ちや他者の気持ちに気づきにくい。 ～トラブル場面では、保育士の仲介が必要である。</li> <li>3歳児：友達がどう考えているのかわかり、また、自分の思いも相手に伝えられるようになる。 ～保育士の仲介が必要になる時もある。</li> <li>4,5歳児：どのような行動が正しいか考え、自ら行動できる。 ～トラブルが起ったときは、自分たちで解決できるように考える。(保育士は、見守ったり、遊びに入ったりする。)</li> </ul>
言葉	<p>「年齢」に着目、「トラブル」に着目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2歳児：子どもの思いを受け止めながら、他の物(玩具)へと興味を移すことで解決できる場面が多く見られる。</li> <li>5歳児：友達に寄り添い、自分で考えながら行動する。</li> </ul> <p>「年齢」に着目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1歳児：保育士が繰り返し伝える。</li> <li>3歳児：保育士が聞くことで、子どもが自分で考えられるようにする。</li> <li>5歳児：見守る。</li> </ul> <p>「すべての年齢」子どもと目線を合わせ、優しく声掛けをする。</p> <p>「自分(子ども)の気持ち」に着目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1,2歳：子どもの気持ちを保育士が代弁する。</li> <li>3歳：他者の気持ちが理解できるように、保育士は子どもが自らの気持ちを伝えることができるように促す。</li> <li>4,5歳児：相手の立場に立つて考えられるような言葉がけをする。また、自分の気持ちを伝えることができる。</li> </ul> <p>「保育士の言葉がけ」に着目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>子どもたちが自分なりに表現できるように、園生活において保育士は、子どもの気持ちを尊重することに配慮する。</li> <li>子どもたちが自分なりに工夫を凝らす。</li> <li>また、言葉がけなどに工夫を凝らす。</li> </ul>
表現	<p>「年齢」に着目、「トラブル」に着目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1,2歳児：自分の思いを言葉にすることが難しい。喃みつき、叩くなどの行動に表れる。</li> <li>3歳児：自分の意思を自分の言葉で伝えようとする姿が見られるが、まだ、保育士の仲介が必要である。</li> <li>5歳児：保育士や子ども同士の声掛けなどのきっかけがあれば自分で考え、決めることができる。</li> </ul> <p>「食事」「遊び」に着目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>睡眠、食事、遊びなど、「日を通じた生活リズムを整えることは、心身の健康づくりの基礎になる。</li> </ul> <p>「年齢」に着目、「トラブル」に着目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「年齢」に添い、年齢や一人ひとりの発達にあった支援や声かけが必要である。</li> </ul>
環境	<p>「年齢」に「人間関係」のつながりに着目</p> <p>「環境」には、「物的環境」と「人的環境」がある。人間関係を築くためには、人的環境を整えることが必要である。</p> <p>「年齢」に着目</p> <p>様々な生活場面(遊び、食事、午睡)に着目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>一人ひとりの子どもの発達適性、興味や関心を満たすため、環境を構成し、安全面に配慮する。(生命の保持)</li> <li>子どもが安心して過ごせるよう、日常の中で抱っこなどのふれあいを大切にすることで、保育士との間に信頼関係が築かれる。(情緒の安定)</li> <li>子どもの気持ちを「着目」</li> <li>「子どもの気持ちを尊重する」を旨とする。</li> <li>子どもの「自分を肯定する気持ち」を育てようとする。</li> </ul>
情緒の安定	<p>子どもが安心して過ごせるよう、日常の中で抱っこなどのふれあいを大切にすることで、保育士との間に信頼関係が築かれる。(情緒の安定)</p>

## 5. 考 察

本研究においては、保育所実習に参加した実習生の学びの特徴を明らかにするために、保育所保育指針を参考としたテーマごとにグループを編成し、グループワークを実施した。今回得られた結果について、3つの視点より考察する。

### ① 「トラブル場面」について

実習生が書いたエピソードで最も多かったのは「トラブル場面」であった。担当の年齢にかかわらず、実習生は、実習中に子どもたちの様々なトラブル場面と遭遇していることが分かった。また、その時に「どうしていいかわからなかった」「困った」「私は何もできなかつたが、担任の先生はすぐ解決できた」など、失敗感や負のイメージをもった実習生がほとんどであった。このことから、保育士の仕事について実習生自身が「大変だ」「できない」「向いていない」などの感情を抱いていることも分かった。

しかし、今回グループワークを実施することで、子どもたちが引き起こす「トラブル」の意味がある程度つかめたのではないかと考える。特に、保育所保育指針と照らし合わせながら「年齢別」に考えることにより、各年齢にふさわしい支援方法を発見することができた。このことは、自らの実践と保育理論を結ぶことにより、実習生にとって新たな学びとなったようだ。それは「人間関係」のグループのみならず、「言葉」や「表現」のグループでも同様の結果が得られた。

### ② 「生活(食事・午睡、遊び)場面」について

保育所では、子どもたちが朝の登園から夕方の降園までの長い時間を過ごしている。その1日の流れの中で様々な生活場面があるが、その場面一つ一つにおける出来事の中で、子どもが成長したり、保育士とのかかわりが深まったりすることを観察し、それが「生命の保持」や「情緒の安定」などの「養護面」を満たしていると読み取った学生も多かった。このことは、保育士養成課程改正に関する見直しの方向性に示されていた「養護の視点を踏まえた実践力の向上」につながることであり、今後、さらに実習生に身に付けてほしい視点である。

また、低年齢児を担当した実習生は、食事の場面の大切さについてのエピソードを多く挙げていた。そして、食事場面が領域「健康」と密接にかかわっていることに気づくことができていた。実習前には、理解するのに苦労したことが、実践し、さらにグループワークをすることで、腑に落ちたと考えられる。

### ③ 領域「環境」について

今回の結果では、領域「環境」に関するエピソードが大変少なかった。また「環境」グループは、保育所保育指針の内容とエピソードの内容を結びつけることが大変難しく、ワーク後のまとめにも苦労をしていた。最終的に「人間関係」とのつながりに着目することにより、「環境」の理解につながった。

保育所における「環境」は、子どもと密接に存在しているにもかかわらず、子どもにどのような影響を与えているのか、あるいは、どのように作用しているのかは、実習生には間接的過ぎて見えにくく、また、20日間という短い期間で読み取ることは難しいことが改めて分かった。

今後は、実習前に保育所の「環境」と、その中で過ごす子どもとの関係性について、具体を踏まえながら、学生に伝えておくことが必要ではないかと考える。

また、今回グループワークを実施することで、「自分以外の見方、考え方」に触れることができたことも実習生にとって大きな学びであったと言えるであろう。自分と同じ失敗を共有し、「自分だけではなかった」という安心感を得ると同時に、保育所保育指針を友達と紐解きながら保育理論を探求することは、今後、自らが躓いた時、どのようにして立ち上がればよいかの指標になったと思われる。失敗感を持ち挫折する前に、立ち止まって調べることで、そこには自分だけではない同じ夢を持つ者が存在し、力になってくれること、そして、切磋琢磨することにより保育職に就きたいという意欲につながったのではないだろうか。これらのことより、グループワークに大きな意義を見出せたと考える。

## 6. ま と め

今回、保育所実習を終えた学生の学びの特徴を整理することにより、今後の「保育所実習研究」の取り組み方の課題が見えてきた。今後は、実習生が抱く実習後における保育士のマイナスイメージを少しでも払拭できるような事前の指導を試みるとともに、実習後のまとめの授業を大切にし、実践と理論を結ぶ振り返りを実施し、保育所実習後も学生たちが「保育士になりたい」という夢をさらに後押しできるような授業を展開していきたいと考える。

### 引用・参考文献

- 一般社団法人全国保育士養成協議会編集 (2018) 『保育実習指導のミニマムスタンダードVer. 2』 中央法規  
厚生労働省「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」(平成15年12月9日雇児発第1209001号)  
別紙2 保育実習実施基準  
(<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000108972.pdf> 2019年3月25日閲覧)
- 厚生労働省(2017)「保育士養成課程の見直しについて(検討の整理)」  
([https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/houkokusyo\\_1.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/houkokusyo_1.pdf) 2019年3月25日閲覧)
- 厚生労働省編 (2018) 『保育所保育指針解説』 フレーベル館
- 國田祥子・西菜見子・小阪英由美 (2019) 「保育教育系大学生の職業レディネス—学年および実習経験による変化—」『中国学園大学 子ども学部 教職課程研究論文集 第2巻 第2号』 p211-223
- 槇尾真佐枝 (2018) 「児童館実習における学びの特徴に関する考察—保育所実習との比較から—」『中国学園紀要 第17号』 p111-117
- 山本佳子 (2016) 「保育所実習で学生が獲得したもの」『中国学園紀要 第15号』 p117-123

